Storybooks Canada

storybookscanada.ca

おばあちゃんのバナナ

Written by: Ursula Nafula
Illustrated by: Catherine Groenewald
Translated by: Yoshimi Matsui

This story originates from the African Storybook (africanstorybook.org) and is brought to you by Storybooks Canada in an effort to provide children's stories in Canada's many languages.

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 3.0 International License.

https://creativecommons.org/licenses/by/3.0

おばあちゃんのバナナ

Ursula Nafula
Catherine Groenewald
Yoshimi Matsui
Japanese
Level 4

(imageless edition)

おばあちゃんの庭はとても素敵なの。モロコシやキビ、キャッサバなどの野菜がいっぱい。でもね、その中でも特にバナナが最高なのよ。おばあちゃんにはたくさんの孫がいるけれど、私がおばあちゃんの一番のお気に入りだということを私は知っているの。だっておばあちゃんはよく私を家に呼ぶから。そしておばあちゃんは小さな秘密を私に話してくれるのよ。でもね、教えてくれないひとつの秘密があったの。それはどこに熟したバナナがあるかということ。

その日の夜、お母さんとお父さん、おばあちゃんに呼ばれた。理由はもちろん分かっていた。その夜寝るとき、盗みは絶対してはいけないと思った。おばあちゃんから、お母さんお父さんから、もちろん誰からも。

次の日は市の日だった。おばあちゃんは早起きして、熟れたバナナと野菜を売りに行った。私はその日はおばあちゃんの家に行きたくなかった。でも行かないなんてことはできなかった。

ある日、大きなわらのカゴがおばあちゃんの家の外の日なたにおいてあるのを見たの。でも「これは何？何に使うの？」と聞いても、「これは私の魔法のカゴよ。」というだけ。カゴの横に何枚かのバナナの葉っぱがあったから、すごく気になって「この葉っぱは何のためのもの？」と聞いたけど、やっぱり「魔法の葉っぱよ。」というだけ。

おばあちゃんの行動、バナナとバナナの葉っぱ、大きなわらのカゴを見ることはとても楽しかった。でもおばあちゃんはいつも私にお母さんのところに行く用事を頼むの。「おばあちゃん、用意をして見せて！」そう言っても「言うことを聞きなさい。」と言ってどうしても見せてくれなかった。

次の日、おばあちゃんが庭で野菜を採っている時、私はこっそりとバナナのとこへ行くと、ほとんどが熟していた。私は我慢できずにたくさんのバナナを取ってしまったの。忍び足でドアのほうに歩いていた時、おばあちゃんが外で咳をしたのが聞こえた。私は必死にバナナを服の中に隠して、おばあちゃんに気づかれないようにこっそりそーっとそばを通った。

次の日、おばあちゃんがお母さんのところに来たとき、私はおばあちゃんの家に急いで行って、もう一度バナナを確認した。そこには見事に熟したバナナがあった。私は一つを取って、ワンピースの中に隠した。そして、かごに毛布をかけてから、家の裏に行き、急いでバナナを食べた。そのバナナは今まで食べたバナナで一番甘くて美味しかったわ！

私がお母さんのところから帰ってきたとき、おばあちゃんはまだ外にすわっていた。でもそこにはかごもバナナもなかったの。「おばあちゃん、かごはどこ？バナナはどこ？それと……」「それらはみんな魔法の場所にあるのよ。」といつものようにいうだけ。私はとてもがっかりした。

二日後、おばあちゃんは「杖を取ってきて」と私に頼んだからおばあちゃんの寝る部屋に行ったの。そしたらね、ドアを開けたとたん、熟したバナナの強い香りがいっぱいに広がったの。そして古い毛布で隠してあるいつもの大きなわらのカゴがあったの。私は毛布をめくり、そのすばらしい香りをくんくん嗅いだわ。

「何してるの?早く杖を持ってきてちょうだい。」おばあちゃんにそう呼ばれたとき、私はその声にはっとして急いで杖を持っていった。「なんでそんなに笑っているの？」とおばあちゃんに尋ねられたとき、魔法を見つけた嬉しさのあまりまだ自分が笑っていることに気がついたの。